

無駄の少ない茎揃いで健全多収

指導部顧問 松浦 一宇

田植期である5月第2〜3半旬は、強風や雨天日が多かった割には、屋中の最低気温が13℃を下回るような異常低温の襲来もなかったことから、活期障害等もほとんど見られない、まずは順調な初期生育を辿っているようである。

6〜7月は、有効茎数確保に向けた、水管理や肥培管理を計画的且つ、葉色変化や茎数の増え方を見ながら基肥量の過不足の診断やつなぎ肥・穂肥等の適切な対応技術を実践することが重要である。

隣の田んぼとの 比べっこは危険

庄内平野オール「ササニシキ」時代は、隣近所のイネと自分のイネとの比較で対応も出来たが、現在は、品種も多様化、また、大型圃場対応した施肥体系「苗箱まかせ」やロング肥料による基肥一発

施肥方法と施肥体系も多様化している。

栽培者個々で品種毎に、その品種特性を十分に考慮した施肥計画でスタートしたはずであり、隣の葉色に釣られて無計画な追肥等は避けたいものである。

現在は、飼料用米のような多肥栽培による超多収ねらいのイネ

づくりなど、多種多様なイネづくりが展開されている。自動車の「わき見運転」が危険なように「わき見栽培」もまた危険さわまりないことである。

当社では、葉色診断板の開発と共に、生育期（葉齢）毎に葉色・草丈・茎数の理想的数値を示した品種毎の基準表や穂肥やつなぎ肥がわかるイナ作メイト3Sなどを作製し提示しているの、参考にしたい健全多収イネづくりに繋げていきたいと思います。

有効茎確保が基本

4つの収量構成要素の基となる穂数（有効茎）を過不足なくキープしと確保することが健全多収イネづくりの絶対条件であり、初期生育の促進拡大を強調する所以である。

イネは順調な生育であれば葉数が増すことに分けつも規則正しく分化生長してくるものである。

無駄の少ない イネづくりを

イネづくりを

図に示すように、総葉数13枚の稚苗では5月10日頃の移植で例年6月20日頃の8葉展開時頃の茎数と、刈り場に残る穂数がほぼ一致することを機械植えでイネづくり

永年に渡り生育調査を実践し、それを基に分げつの増え方や有効茎・無効茎の関係（傾向）を表したのが21ページの図である。

普通、稚苗では5葉期に次の6葉と同伸の3号分げつから、順次4号、5号と出て、8葉期に次の9葉と同伸の6号分げつまでが有効茎になっているのが稚苗イネづくりの分けつ体系となっているのがほとんどである。

尚、前述した一次分げつの外に3〜4号分げつといった下位の分げつにはさらに二次分げつも発生するが、二次分げつや7〜8号といった高位の分げつは無効化しているのが大方である。

をして以来数十年の生育調査で体験し、自信のもてる傾向として示しているところである。

問題は、目標茎数が確保された

時点でもビタリと自動的に分けつが止まってくれないところにある。分けつ後期に図にあるように出てくる無効分げつが多ければ多いほど無駄の多いイネづくりをしていることになる。

出穂後の登熟歩合にも影響することから無駄の少ないイネづくりとして、1つには基肥量が適量で8葉期には肥効（葉色）は下降を辿ること。2つには深水にして二次分げつや7〜8号の高位分げつを分化生長を阻止する手段である。

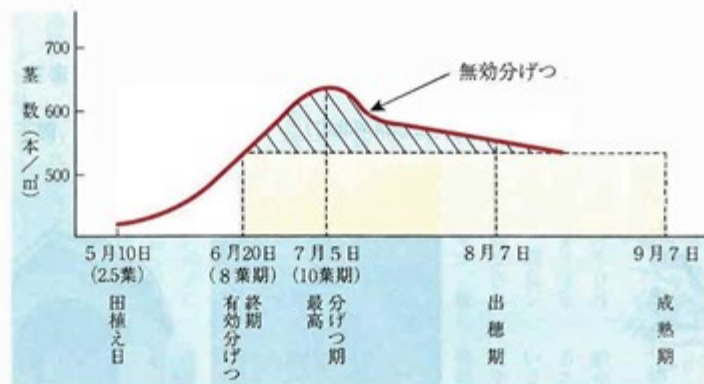
写真は、筆者がササニシキ時代に深水管理を実施したイネと通常の水管理のイネを比較したものである。

茎の太さ・茎揃い・穂揃いの良否に歴然たる差が分かる。特に茎数過多で細茎ゴジャゴジャになるようなイネには早期から深水管理が有効であるので、積極的に取り組むことをお勧めする。

尚、深水管理の時期や水深等については主筆が詳細に記されているので、ここでは割愛する。

深水管理が万能ではない

どんなイネにも深水管理が良いという訳ではない。深水がマイナスになるイネとして、茎数確保のままならないイネや基肥N量が多過ぎてどうにも止まらない過剰生育イネは逆に早々に中干しをして、土壌中Nの消尽に努めた方が得策である。生育状況に適した水管理を選択することが重要である。



(総葉数13枚の稚苗) (松浦)

図. 有効分げつと最高分げつ（無効分げつ）の模式図



通常の水管理イネ(左)と深水管理したイネ(右)の比較